

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 412 回 計画停電はいつまで続く？

2011.4.3

今回の大震災で、直接被害に遭遇した被災地や被災者の苦悩は想像を絶するものがある。幸いといったら大変申し訳ないが、直接被害を受けなかった地域の人々も、間接的に何らかのマイナスの影響を受けていること、否めない事実である。そのような意味では全日本的に留まらず、世界的な混乱を招いた大惨事であったといえる。

当面実務的に困っているのは、業界用語で「輪番」というが、一般的には「計画停電」ではないだろうか。

日本の「電力」事情はどうなっているのだろうか？

早速地元の東京電力の支店長に話を聞いた。

(資料は東京電力パンフレット「電力設備」平成 22 年度版)

蓄電池のような微量な物を除いて、電気はストックが利かない。全て 1 日当りのフローで対処しなければならない。東京電力の発電設備は約 6,449 万 kW で、9 電力会社中約 32% を占めている。その内 59.2% が火力発電所、原子力発電所は 26.8% で約 1,731 万 kW である。民主党の嫌いなダム建設を伴う水力発電所は、全体の約 13.9% となっている。

問題の原子力発電所のうち、福島第一の 6 基、福島第二の 4 基は現在休止中である。この 2 箇所の合計生産電力量は約 910 万 kW で、東電の全水力発電所の生産量より多い。

更に柏崎狩羽の 7 基中 3 基は点検中、稼働しているのは 4 基のみである。

また火力発電所も、今回の震災で被害を受けた。茨城県の鹿島と常陸那珂、福島県の広野等、損傷被害のため点検中である。

今回の震災で電力施設としては、約 60% がダウンしたとあって良い。

少しづつ春めいてきた最近の一日当りの需要量は、約 3,350 万 kW で推移している。

これに対し供給力は 3,750 万 kW あるので、供給が需要を上回り、従って計画停電をしないでこと足りるといふことらしい。

しかし何としても物理的に不可能なのは、夏季、特に梅雨明け以降である。一日最大電力は、ここ数年 6,000 ~ 6,500 万 kW をゆうに超えている。この時期までに火力発電所の復旧が間に合ったとしても、せいぜい供給力は 4,500 ~ 5,000 万 kW、需要に 1,000 ~ 1,500 万 kW 以上、絶対的に足りない計算になる。

周波数の違いもあり西日本の電力を買うわけにもいかない。また当然輸入も出来ない。

結論は、需要量 = 供給量にするしかない・・・ということになる。

計画停電はいつまで続くか、今は誰も回答できないでいる。

今までの計画停電は、いわばリハーサル、夏以降が本格的な停電実施の本番にならざるを得ない。ご迷惑をおかけして大変申し訳ないが・・・という支店長の話だった。

面と向かって文句は言いづらいが、この電力不足が産業界に与えるリスクな影響は計り知れないものがある。中小企業も全ての経営資源を見直し、需要時のスライドによる「ピークシフト」を目指し、価値観と実際のオペレーションを再構築すべき時であろう。

今まで通りの生活、仕事のやり方を抜本的に変える必要があるだろう。

事業継続の阻害要因は、地震や津波に限らない。感染症や、今回の電力不足も、それを拒む労働力も、立派なリスク要因である事、肝に銘じるべきである。